

《論 文》

小説『小さいうち』にみる教育・家族・子どもの歴史

— ジェンダー・階層・戦争/平和の比較参照軸をもとに —

小 針 誠

1. はじめに

本稿の目的は、小説『小さいうち』を素材に、戦前期の家族・教育・子ども像の時代考証とともに、ストーリー内部に交差する複数のコントラストから、小説の主題について検討することにある¹⁾。

『小さいうち』とは、作家の中島京子が『別冊文藝春秋』第278号(2008年11月号)から第285号(2010年1月号)に掲載・発表したフィクション小説である。2010年5月には文藝春秋より単行本として刊行され、中島は2010年上半期・第143回の直木賞を受賞した。さらに2012年3月には、文春文庫より文庫版が刊行されている。

この小説が大きな注目を集めた契機のひとつは、2014年1月より上映された同名タイトルによる映画化であろう。山田洋次監督と松たか子の主演によって、本小説を原作とした映画が制作・上映されたのである。公開6週目の3月初旬時点で、累積動員数は99万5,000人を超え、累積興行収入は10億4,600万円にのぼった。また、同作品は第64回ベルリン国際映画祭に出品され、出演者のひとりである黒木華は最優秀女優賞(銀熊賞)を受賞した。

この物語は、戦前の東京を舞台に玩具メーカーの管理職として勤務するサラリーマン一家の平井家に、山形県の農山村出身の布宮タキが住み込みで女中奉公に出るというストーリーを中心に展開する。平井家は東京西部の郊外に「赤い屋根の小さなうち」(文化住宅)を月賦で購入し、そこに暮らす、雅樹²⁾・時子夫婦と子どもひとり(恭一)の三人家族である。タキは「小さいうち」に女中部屋をもらい、住み込み女中として、熱心に家事や子どもの世話に当たり、忠実に平井家に尽くす。平井家もまたタキに全幅の信頼を寄せ、「タキちゃん」と呼ぶなどして、家族と同じように大切に接する。タキは専業主婦の時子に、東京ことばや料理・礼儀作法など“ハイカラ”なライフスタイルを教わり、来客の友人、時子の母親や実姉からも、社会情勢や学校・家族事情など多くのことを知ることになる。しかし、あるとき雅樹の部下の板倉正治が平井家を訪れる。それを契機に、時子と板倉との間の横恋慕がタキの疑惑として現れ始める……。そしてアジア・太平洋戦争の開戦とともに、板倉は出征し、平井家や「小さいうち」もまたその渦中に……。

この物語については、昭和初期の戦間期から戦時体制に至る日本社会の変貌のみならず、同時期の東京・都市郊外で暮らす新中間層の家族や子ども、そして彼らのライフスタイルを克明に描いている点において、これまでの教育・家族・子どもの歴史研究から見ても、非常に興味深い作品である。それについては、中島自身が本作品の執筆にあたって、同時代の家族を含め

た歴史について、相当に時代考証を深めたに違いないことは容易に推測がつく。人物設定や学校事情、当時の社会情勢など、部分的に架空ないしは匿名で記されているながらも、家族あるいは教育や子どもの歴史の観点から見れば、いわゆる「近代家族」(modern family)といわれる東京郊外の新中間層の家族やそこで特に重視された子どもの教育の様子が(ある種の理念型を含みつつも)これまでの家族史研究や教育史研究を踏まえたかのように描写されている³⁾。いわゆる昭和ノスタルジー漂うフィクションでありながら、教育史・子ども史・家族史の観点からみても非常に歴史的示唆に富む作品である。

本稿では本作品の分析を通じて戦前の新中間層の教育・家族・子どもの歴史を検討することが課題である。なお、以下で用いる小説『小さいうち』からの引用については、2012年12月に刊行された文春文庫版を用いる。同書から引用・参照する場合は(ページ数)のみを表記するものとした。また、映画についても適宜参照した。

2. 輻輳する複数のコントラスト

本作品の興味深い点は、昭和戦前期の東京郊外や家族の様子あるいは独身男性と既婚女性との間の横恋慕を描いているだけに止まらない。タキの目を通して見た昭和10年代の平井家や東京が描写されるストーリーを中心に、複数のコントラスト(対照性)が輻輳しながら展開していくところにあるといつてよいだろう。挙げていえば、①過去と現代との間のコントラスト、②個人の歴史と国家の歴史のコントラスト、③昭和戦前期の都市郊外の新中間層と地方の農山村との間の生活水準・ライフスタイルのコントラスト、④平和と戦争との間のコントラストである。

①の過去と現代との間のコントラストについては、老境のタキが出版社の依頼で自らの半生についての回顧録を書き綴るシーンにあるといえよう。小説の内容から推察すると、タキは1917(大正6)年頃に山形県の農山村に誕生した。きょうだい6人を抱える農山村の家族にあって、彼女は尋常小学校卒業後の1930年頃に、親類の伝手を頼って、東京に女中奉公に出る。

さらに、現在を生きる老境のタキと、大甥(妹の孫)で大学生の健史との会話は①現在と過去とのコントラストのみならず、②個人の歴史と国家の歴史の間のコントラストを鮮明にする。

健史は、タキの回顧録の添削という口実を作って一読しては、ほぼ必ずといってよいほど、その内容に難癖をつける。彼は、学校教育や教科書における日本史の「通説」を持ち出しては、タキの描写する平井家での平穏な生活や東京の平和な状況を容易には認めようとはしない。

タキが初めて上京した1935年当時を指して、「おばあちゃんは間違っている、昭和十年がそんなにウキウキしているわけがない、昭和十年には美濃部達吉が『天皇機関説問題』で弾圧されて、その次の年は青年将校が軍事クーデタを起こす『二・二六事件』じゃないか、いやんなっちゃうね、ほけちゃったんじゃないのか、というのだ」(40頁)、「おばあちゃん、過去を美化しちゃだめだよ…女中奉公が女子大みたいなものだなんて、誰もそんな嘘、信じてないよ」(46頁)、1937年に、南京陥落で戦勝ムードに沸く東京の様子を描くタキに対して「南京じゃあ、大虐殺が起こってたのに、東京では戦勝大セールのアドバルーンが上がってたってことでしょう? 西武が優勝したときの西武デパートみたいにさ。もっとすごいのか。なんとも言えないよ、

こういうのって」(81頁)などの発言にみられるように、タキの直接体験を信用しないし、不満さえ漏らしている。

しかし、タキもまた「健史がなんと言おうと、昭和十年、十一年ごろといえば、わたしには思い出深い、懐かしい、平和な情景しか浮かばない」(44頁)や「なんにも知らないくせに、四倍も五倍も生きてる人間をつかまえて意見するとは、いい気なものである。きっと、昭和十二年といえば、盧溝橋事件のあった年なのだから、それが華やかだなんて嘘だとか、そういう、とんちきなことを言いたいのだろう」(56頁)などのように、健史の歴史観に反論するかのよう

に述べているシーンや台詞がたびたび現れる。

中島本人は、本小説の執筆に当たって、「私も祖母から話を聞いたり、当時の資料を読んでいたが、調べを進めるうちに、戦前の暮らしがとても近いものに見えてきました。日中戦争が始まっても、太平洋戦争以前の東京はかなり余裕がありますね」(倍賞・中島2014)と述べているように、タキの回顧録に対する健史の違和感は、市井の個人の経験を主に描かれる民衆史と、教科書などに記述される典型的な国家史・政治史とが必ずしも一致しないことに起因している。タキの個人史や平井家の家族史は時として国情に翻弄されながらも、必ずしも国の歴史を直接なぞる形で存在していたわけではない。それはまたタキの描写を通じて、既存のステレオタイプ化した特定の歴史像を批判する効果を有している。

3. 新中間層と近代家族

本作品を貫く最も明瞭なコントラストは③昭和戦前期の都市新中間層(平井家)と地方の農山村出身者(タキ)との間の生活水準・ライフスタイルをめぐるコントラストであろう。

(1) 新中間層の家族

ヨーロッパにおける「近代家族(modern family)」は主に上流のブルジョワ階級から発生してきたが、それに対して日本の場合は都市部の新中間層(new middle class)において確認される(落合1997, 沢山2013など)。

「近代家族」の特徴について、落合(1997)のまとめに従えば、①家内領域と公共領域の分離、②家族成員相互の強い情緒的關係、③子ども中心主義、④男は公共領域／女性は家内領域という性別役割分業、⑤家族の集団性の強化、⑥社交の衰退、⑦非親族の排除、⑧核家族化という8点を挙げることができる。つまり、「近代家族」とは、家族成員が愛情で結ばれた核家族を形成し、男親は賃労働、女親は専業主婦として家事・育児に専念する家族であり、少なくとも生まれた子どもに対しては卓越した地位が与えられ、親たちと同様、学校教育を通じて得られる知識・技能あるいは学歴によって地位達成することが強く求められる家族を指す。

近代日本においては、都市部の新中間層の家族がおもに「近代家族」を実現することになった。新中間層はいわゆる俸給職(会社員や銀行員など)、公務職(教員や官吏など)、専門職(教授、医師、法曹など)で構成される近代セクターの職業とその世帯を指しており、それは産業化の進展とともに、大正・昭和初期にかけて、その存在が注目されるようになった。

その特徴について、大きく3点を挙げることができる(小山2002)。

第一に、夫は家庭から離れた職場へと通勤する俸給生活者としての生活を送り、妻たちは生産労働・賃労働から切り離され、主婦として、場合によっては女中を使うなどしながら、家事や育児に専念していた。家族は生産機能を失い、消費と再生産の場へと純化していった。

第二に、新中間層とは学校教育を媒体とした近代的職業であった。その子どもたちは相続すべき家産を持たないために、学校教育—学歴を通じて自らの社会的地位を獲得する必要に迫られていた。子どもは母親によって愛情深く育てられたが、教育され、学歴を獲得することが何よりも求められた。新中間層の増加は受験競争の激化と上級学校の量的拡大をもたらした。

第三に、新中間層の多くが農山村から学校教育を受けるために都市に流入し、そのまま都市部で就職・結婚した農家出身の二・三男によって担われた。彼らの多くは両親と未婚の子からなる核家族を形成した。家事・育児専業の妻たちは夫の両親と同居を経験していないことが多く、伝統的な育児方法ではなく、育児雑誌・書物などに依拠した新しい育児を実践した。

平井家がそうであるように、東京の新中間層は1920(大正9)年と1930(昭和5)年には東京府人口比12%から13%の間で推移した。また、関東大震災(1923年)や東京市市長・後藤新平の提唱した「大東京市構想」により、1931年には近隣82町村を編入し、それまでの東京市15区は大東京市35区へと拡大・再編された。

旧市域(旧15区)の人口は1915年に224.5万人で最高に達するものの、関東大震災で旧市域の44%を焼失し、約60万人もの市民が住宅や職場を失った結果、大幅に減少した。その代わり、後に東京市に編入された新市域と呼ばれる郊外人口が急増する。関東大震災の被害を受けて東京市は様々な震災復興を実施し、家や職場を失った人々が旧市域近隣の郡部や郊外の新市域に住まいを構えるようになった。それに加えて、新たに東京に移住・定住した人々が新市域に住居地を求めた結果、郊外化が進んでいった。牛島(2001)の研究によれば、1920年代にはすでに東京市から西部・西南部にかけて「公務自由業」(=新中間層)の割合が高い地域が広がっていたが、1930年代にはその傾向が一層顕著になる。

都市の郊外化を背景に、新中間層向けの市街地・住宅地の造成、および郊外と都心を結ぶ鉄道網の整備に力が注がれた、なかでも東急、小田急、東武、西武などの私鉄資本はそれぞれ計画的に田園調布、成城学園、常盤台、大泉学園などの開発をおこない、鉄道駅を中心とした宅地開発(郊外住宅地の建設)を進めていった。その結果、「郊外に住み、電車で通勤する/買い物に出かける」というライフスタイルが新中間層の間で次第に定着していった。

平井家の「小さいうち」もまた「東京市を膨らませて西へ西へと延びる私鉄の、真新しい駅からまっすぐ細い坂道を上って左手の角に建った洋館」(44頁)とあるように、郊外沿線に建てられた文化住宅であった。

平井家の(専業)主婦である時子について、タキよりも8歳年長だという彼女は1909(明治42)年頃の誕生と推定できる。時子は1916年頃に尋常小学校に入学、卒業後は(高等)女学校に進学した。なお、時子には「目白の女子大」(女子専門学校・「日本女子大学校」のことを指しているのか)を卒業した睦子というジャーナリストを生業とする女学校時代の友人がいて、作品中にもたびたび登場する。睦子はタキに吉屋信子の小説の一節を紹介している。

時子は、香蘭社のティーカップにゆっくり紅茶を淹れて飲んだり(25頁)、小説『風と共に去

りぬ』を読み、婦人雑誌『婦人之華』（『婦人之友』⁴⁾を示唆したタイトルか）を購読するような、教養の高い女性であった。それは彼女が高等女学校の出身で、経済的・文化的に恵まれた家庭環境で育てられてきたことを推察させる。日常の言葉遣いについても、「よくってよ」「いやだわ」などの「テヨダワ言葉」を用いている。テヨダワ言葉は、おもに高等女学校の生徒や有産階級出身の限られた社会階層の女性たちの間で使われた会話体であり、『少女の友』など女学生がよく購読していた少女雑誌でも広く用いられた文体・言葉である（今田2007）。

しかし、タキがいうように「わたしが覚えている限りの時子奥様は、働くのは、まるで不向きだった。お祝いとか、お祭りとか、お出かけとか、お客様とか、『お』のつくことをなさるのが似合う方だった」（165頁）ことから、タキなしでは家事や子育てをすることさえ難しい女性であったのかもしれない。牛島(2001)によれば、東京の郊外化と戦間期における新中間層の勃興そして女中の利用の仕方から、戦間期に新中間層が増加した東京西部・西南部の郊外は産業化の過渡期に生まれた「女中」と近代家族の誕生とともに生まれた「主婦」からなる「二重構造」を呈する都市空間になった。まさに時子とタキがその二重構造を象徴しているといえよう。

（2）新中間層家族の教育戦略～卓越する子どもの地位と学校選択～

近代家族の特徴のひとつである子ども中心主義と教育に対する熱心さは『小さいうち』でも描かれている。平井家には一人息子の恭一がおり、両親の庇護のもと、少なく生まれよく育てられた子どもであった。彼には、専用の「子ども部屋」があり、幼少のころから玩具や『コードモノクニ』『小学一年生』などの児童雑誌を買い与えられていた（59頁）。

作品のなかでも、子どもの進学・進路をめぐるエピソードにこそ、新中間層の教育熱心さがよくあらわれているといえよう。それは時子本人と言うよりもむしろ、時子の実姉で、麻布に住む官吏の専業主婦である「麻布の奥様」が登場するときである。「麻布の奥様」は「小さいうち」を来訪すると、ほぼ決まって、子どもの教育、なかでも子どもの進学を話題にする。「麻布の奥様」にも、恭一よりも年長の正人というひとり息子がおり、時に正人の学業成績を鼻にかけつつ、妹の時子に、教育方針を助言する場面がたびたびみられる。

以下は、正人の中学校受験の場面である。

麻布の奥様は正人ぼっちゃんの中学受験に夢中で、小学五年生から受験塾に通わせ、七年制の学校にやるんだと目の色を変えていた。お母様に首根っこをつかまれるようにして、正人ぼっちゃんは、日曜ごとに、青山会館で行われる模擬試験に連れて行かれていた。今年が受験本番で、東京高校だか府立高校だか、とにかく東京でいちばんの難関校を受けさせるのだという話は、耳のタコが八本足で歩き出すほど聞かされていたので、奥様は心の底からうんざりした声を出した（31頁）。

ここでいう「中学受験」とは言うまでもなく旧制中学校の受験である。旧制中学校は戦前の男子中等教育機関で、尋常小学校卒業後の5年制（12～17歳）の学校であった。現代日本の学校

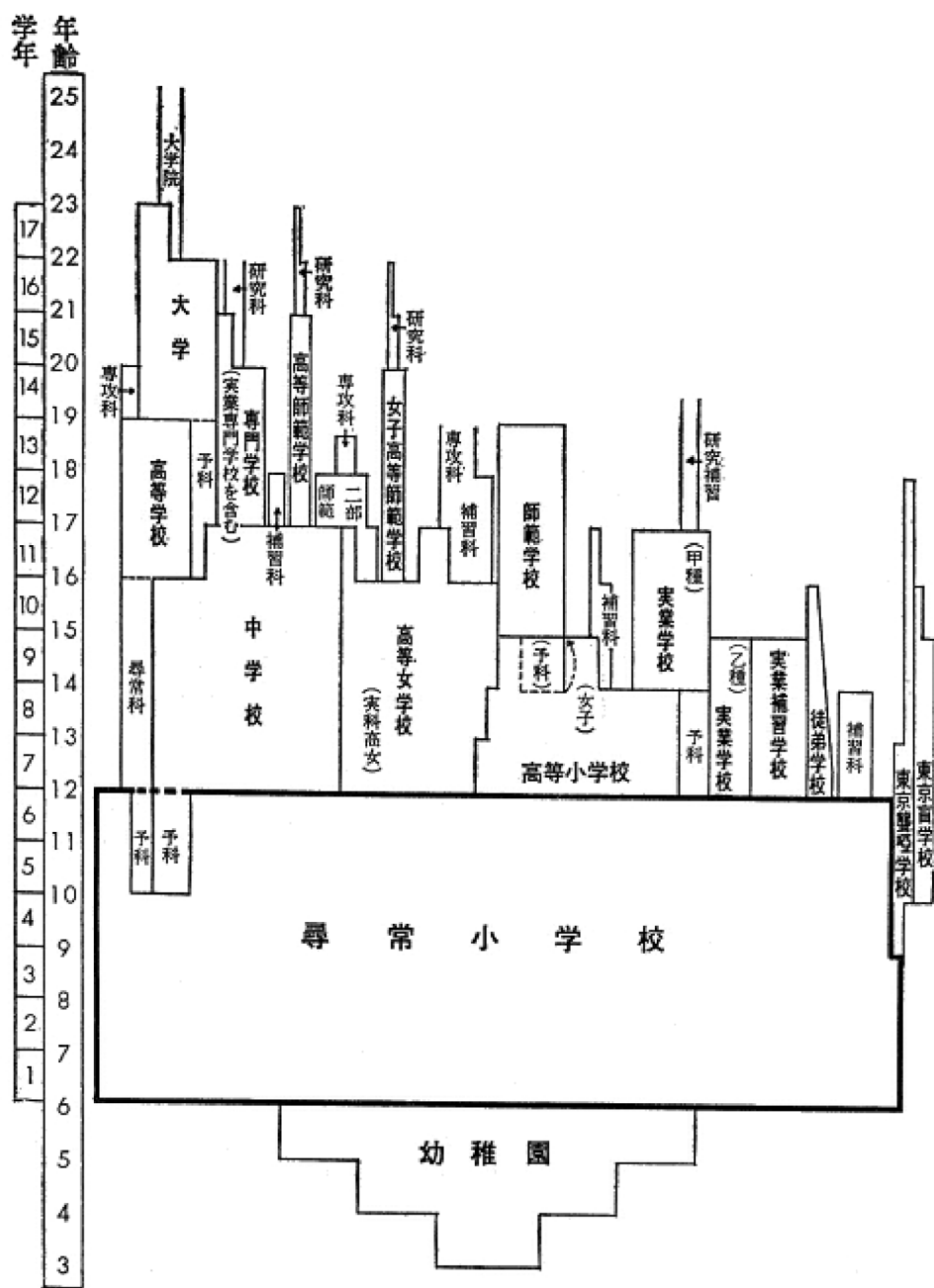


図 大正8年当時の学校系統図

資料：文部省(1972)『学制百年史 資料編』373頁

教育制度との対比でいえば、旧制中学校の多くは、現在の公立高校普通科のなかでもいわゆる進学校の前身になっていることから、当時から主に上級学校、特に高等学校や大学予科などの進学に向けた準備教育を目的としていた。また、中学校卒業後に高等学校(旧制・3年制、一部4年制)の厳しい入学試験を突破し、入学・卒業すれば、学歴社会の頂点である帝国大学に進学できた。つまり、戦前の学校制度(旧制)によれば、中学校5年と高等学校3年を経て、帝

国大学に進学するというのが最も優秀な男子エリートの進路であった。

ところが、1918(大正7)年の高等学校令において、官立のほか公立・私立の高等学校とともに、七年制の高等学校の設置も認められた。先の引用中に登場する東京高校は官立唯一の、府立高校もまた七年制高等学校である⁵⁾。正人はこの七年制高等学校の尋常科を受験しようとしたのだろう。七年制高等学校は尋常科と高等科の二科にわかれ、尋常科(修業年限4年)が中学校相当、高等科(同3年)が高等学校相当とされた。一般的には、中学校入学から高等学校卒業までに8年間を要し、しかも高等学校の進学には熾烈を極めた受験競争があった⁶⁾。他方、七年制高等学校の場合、中学・高校の在学期間が1年短縮されるとともに、尋常科・高等科と一貫した教育の系統化が図られたことで、高等学校進学のための厳しい受験競争を回避して、そのまま併設の高等科に進学できた。高等学校さえ卒業すれば帝国大学まで進学できたから、七年制高等学校は入学をめぐって激化する受験競争に心を痛める教育ママにとっての最大の魅力であった(秦2003)。

とりわけ「麻布の奥様」が正人のために選んだ東京高校や府立高校は、既存のバンカラ主義の「ナンバーズクール」と呼ばれる高等学校⁷⁾とは異なり、イギリスのエリート私立中等教育機関であるパブリックスクールを範に設置されたこともあり、紳士の育成をめざした自由主義的な教育が実践され、学生の雰囲気もスマートであったという。

「麻布の奥様」によれば、中学校の受験・進学に当たっては、小学校の選択までも重要であるという。

麻布のお姉様が正人ぼっちちゃんの教育に目の色を変えていたころには、少しおかしいのではないかというようにもおっしゃっていた時子奥様だけれども、ご自分のお子さんのこととなると、それはまた話が違ってくるらしい。「あなたはまたぼんやりしているから、付属小学校の試験なんか、みんな終わっちゃったじゃないの。…あのあたりの名前もないような公立小学校に入れてしまっただけでは、上級学校への進学はおぼつきませんよ」……小学校選択を誤ると自分の息子に不利益が及ぶかもしれないと思った時子奥様は、がぜん宗旨替えをして麻布のお姉様の信奉者となった。「正人だって小学校受験はしなかったでしょう？」救いを求めるように時子奥様は尋ねる。「受験はしないけど、うんと早く申し込んだわよ。人気のある学校はすぐいっぱいになってしまいますからね。……本郷の誠之小学校、青山の青南小学校、麴町小学校、番町小学校。それと正人の行った白金小学校。この五つくらいに入れなければ、まともな中学へは行かれないわ」なにしろ奮闘努力の結果、正人ぼっちちゃんを、当時の中学受験で最難関であった、府立高校の尋常科へ合格させたばかりだったから、それはもう、鼻息の荒いことすさまじい(102～103頁)。

タキが尋常小学校を卒業した当時の山形県内には、中学校7校、高等女学校10校(いずれも公立)が設置されていたものの、これらの学校はおもに人口の多い市部に設置された(上倉1952)。また、当時の山形県の中学校進学率は6.6%、高等女学校進学率は9.0%に過ぎなかった⁸⁾。農村地域出身のタキにとって、中等学校に進学した同級生は数えるほどしかなかったに違いな

い。むしろタキがきょうだいや同級生について「きょうだい六人のうち、上四人はすべてどこかへ奉公していたから、わたしも行くのがとうぜんだとおもっていた」(11頁)と述べているように、中等学校には進学せずに、長男を除いて、家を出ていくことはほぼ当然のなりゆきであった。だからといって、当時の山形県の子どもの学力が決して低かったわけではなく、1933年～1937年に実施された壮丁学力検査(国語・算術・公民)をみる限り、山形県の各教科の正答率は全国平均正答率を大きく上回り、平均点日本一を記録する教科もあった(石島2006)。

他方、同時期の東京では、中等学校の入学難が社会問題化していた。1935年当時の東京の中等学校進学率は中学校16.1%、高等女学校22.3%と全国で最も高かった。ところが、同年の入学率(入学者数÷志願者数×100・%)をみると、東京の中学校のそれは32.5%(官公立28.8%・私立34.5%)、高等女学校については36.1%(官公立27.5%・私立39.2%)と、山形県の中学校入学率75.8%、高等女学校83.4%と比較しても、かなり低い。

当時の東京には、中等学校の入学難問題に対して、進学に有利だとされる名門小学校が存在していた。先の引用にもある、入学選抜のある師範学校附属小学校や私立小学校(小針2009)、あるいは公立小学校にさえ「受験名門校」「進学有力校」などと呼ばれるいくつかの学校が出現した。たとえば、先に「麻布の奥様」も挙げていた、番町小学校(麹町区)、誠之小学校(本郷区)、青南小学校(赤坂区)などの各公立小学校である。これらの小学校は受験・進学実績もさることながら、担任教師から受験準備教育を受けたり、校区外から多数の越境入学者を受け入れ、しばしばマスコミに批判的に取り上げられるなどして、特に有名であった。

そのなかでも、本郷区の誠之小学校を例にとると(誠之学友会1988、所澤・木村1988)、同小学校の越境入学者の多くは、通学区外ではあるものの、小学校の所在する行政区内、あるいは隣接する行政区に在住する都市新中間層出身の児童であった⁹⁾。1936年5月に実施された調査によると、学区内の児童はわずか21.9%に過ぎなかったという(誠之学友会1988)。市域の拡張や交通網の整備により、学区外の越境入学・遠距離通学を可能にしたといえるだろう。

これら公立有名小学校を志向する保護者は、都市新中間層であり、「学歴主義」を重視・志向する一方、初等教育を、あくまで中学校、高等学校、帝国大学への進学(女子の場合は府立高等女学校、女子高等師範学校や女子専門学校への進学)に連なる正系エリート・コースの「序章」として位置づけていた。

同校卒業生の進路をみると、男子の場合は東京府立第一中学校(現・東京都立日比谷高校)や隣接する小石川区の府立第五中学校(現・都立小石川中等教育学校)などの府立中学校か、長い伝統を有する一部の中学校(私立開成中学校など)や同じ本郷区内にあった京華中学校を志向する傾向が強かった。女子の場合についても同様に、府立第一高等女学校(現・都立白鷗高校・附属中学校)や近隣の府立第二高等女学校(現・都立竹早高校)などの府立高等女学校、あるいは近隣の私立高等女学校(桜蔭高等女学校や跡見高等女学校)に入学する傾向がみられた。併設ないしは関連の女専に進学できる日本女子大学校附属高等女学校や東洋英和女学校などに進学する者はほとんどいなかった。

正人はその後、正系エリート・コースを歩んだ。

正人ぼっちゃんは、府立高等学校から首尾よく帝大の理科に進んでいらして、その優秀さは、時子奥様のお姉様である麻布の奥様が、ことあるごとに吹聴されていた。比べて、恭一ぼっちゃんの学業成績は、すこぶる悪かった。……時子奥様は心配されて、正人ぼっちゃんを家庭教師によんだのである。翌年は恭一ぼっちゃんも、中学受験を控えていたからだ。麻布の奥様などは、「このごろじゃあ、新しい中学が、雨後の筍並みにできるじゃないの。近頃できたのが、府立二十三中でしたか。一中や四中に入ろうというんじゃないなら、めくじら立てずとも入れるでしょう」と、端から馬鹿にしておかっていた。一中や四中というのは、当時の名門校のことだ。十中くらいまでが、古くからあって歴史のある中学で、特別成績のよい子弟が入るイメージがあった。もちろん新設校であっても、上級学校に進むのは、それなりに難しかった。東京郊外は人が増えて、学校はいくら造っても追いつかないという話だった(239～240頁)。

正人が入学した府立高等学校は4年制の尋常科のあと、高等科では文科と理科にわかれた。また、引用中の一中とは東京府立第一中学校、四中とは同第四中学校(現・都立戸山高校)をそれぞれ指し、学校の歴史も古く、一高(第一高等学校)をはじめとする高等学校に多数の進学者を輩出した、当時の東京府内では指折りの進学校であった。

それに対して、恭一が中学校に進学した経緯は以下の通りである。

十九年の春には、恭一ぼっちゃんが念願の中学に入学した。入学試験は三日間もあり、最初の日が口頭試問、翌日は体育で、跳躍、懸垂、駆足、その次の日が筆記試験だった。府立第二十五中は新設校で、麻布の奥様がおっしゃるには入りやすいところらしいけれども、勉強嫌いのぼっちゃんにしては、ずいぶんがんばった成果だ。ぼっちゃんの進学は、とにかくめでたかった(251～252頁)。

恭一も終戦の間際である昭和19年春に東京府立第二十五中学校に進学した。しかし、戦前の東京府立中学校は第二十三中学校(現・都立大森高校)までしか設置されておらず、「第二十五中学校」は架空の設定である。東京の中学校のなかでは、学校の歴史や高等学校への進学実績によって、入学難易度や学校に対する社会的評価・威信が構造化されていたのである。

4. 農山村出身者と女中

1917年頃の生まれと推察されるタキは1924年頃に尋常小学校に入学し、その後「農村の口減らし」を理由に実家を離れ、上京し、平井家で女中奉公に上がった。タキの実家の所在地については、山形県の農村地域という以外の言及はないものの、小作人であったかもしれないし、貧農であったかもしれない。それというのも、1932年当時、山形県内の85%の家が借金を負い、その平均額は1,300円余にもぼっていたからである(石島2006)。特にタキが小学校入学後には金融恐慌(1927年)や世界恐慌(1929年)、そして1930年以降には東北地方で天候不順による凶作などもあり、農山村は疲弊していく一方であった。貧農の子どもは尋常小学校卒業あるいはそ

れを俟たずに、奉公に出ることも珍しくなかった。

女子はおもに工場の工員(女工)として働くか、地主の豪農や中流以上の農家・商家あるいは都市部のサラリーマンの女中として一家に仕えることが多かった。それ以外にも、借金の片として、東京などの都市部に娼婦や芸妓として売られていくになる者もかなりの数にのぼった。

一般的に、女工になった者は厳しい労働を強いられ、女中になった者も劣悪な条件・環境のもとで働かされ、虐げられ、年頃になると遊郭に売られるなど、ひどい扱いを受けることも少なくなかった。タキの姉であるタミは「近隣のお大尽の家に行かされて、たいへんにつらい思いをして気の毒であった。あかぎれ、しもやけだらけの手と足をして、藪入りに泣きながら里帰りをした」(11～12頁)ようであるし、それ以外にも「都会での求人頼りに行き先も知れず上京し、娘が悪徳桂庵に女郎屋へ売り飛ばれるようなこともあった時代だった。村で評判の色白娘のところへは、芸者屋が買いにくることもあった。だいたい七歳くらいの、小学校へ上がるか上がらないかという娘が買われていったりした」(12頁)という。タキの言葉を裏付けるように、山形県でも、やむにやまれず、数百円の前借金の片に「可愛い娘を人身御供」する娘身売りの問題が増えていった(石島2006)¹⁰⁾。

タキのような女中に関していうと、1920年春に実施された第一回『国勢調査』によると、「女中」の総数は約58万人にのぼり、産業別に見た女性有業者のうち、農林水産業、工業、商業につぐ従事者数であった。タキが上京して女中になる1930年当時に実施された国勢調査によれば、住み込み女中は約70万人、この数は被雇用者として働く女性のうち6人に1人が女中という計算になる(清水2004)。東京のみに注目すると、1930年の東京市内には77,204人、府下には68,934人の住み込み女中がおり、翌31年に東京市およびその近郊で実施された「女中に関する調査」によれば、女中を雇用していた世帯のうち、最も多いのが商業で29.3%を占め、ついで会社員13.7%、無職8.9%、重役8.2%、医師5.8%、軍人3.1%、教師2.9%と続いた。

また、東京市は1930年代に、しばしば女性の職業調査を実施し、東京市役所編『婦人職業戦線の展望』1931年刊や東京市社会局職業課『東京市女中に関する調査』1936年刊などの報告書を刊行している。両調査の実施時期を見る限り、前者はタキが女中をはじめた時期、後者は平井家で女中をしていた時期と大きく重なる。これら両データを分析した清水(2004)によると、当時の東京市内の女中には以下のような特徴があったという。

年齢は10代後半から20代前半までが9割を占め、学歴は尋常小学校卒が大半を占め、保護者の職業の7割以上が「農業」、就職経路は約8割が縁故で、大半はひとり女中、過半数は「雑働女中」で、月給は5円未満から30円以上と幅が広いが、「10円以上15円未満」が51%と半数を占めた。

これら諸条件は概ねタキにも当てはまっていたといえる。ただし、彼女は一般的に考えられていた女中のイメージとは異なって、平井家でとても大切に扱われ、人間関係も大変恵まれていた。恵まれた女中としての奉公できた平井家であったからこそ、タキは平井家に尽くし、後年に「楽しい思い出」として振りかえることができたに違いない。

5. 平和と戦争

本小説で、タキが平井家で過ごす後半部分は戦間期から戦時体制を対象としている。これが④平和から戦争へのコントラストである。

本作品でも、日中戦争の戦勝記念に沸く東京、興亜奉公日(1939年)、街に立ちはじめた「贅沢は敵だ」の看板、紀元二千六百年(1940年)、そして真珠湾攻撃(1941年)とアジア・太平洋戦争開戦に至る過程が描写される。教育や子どもの面でも、「ぼっちゃんの通う小学校が国民学校と名前を変えた四月頃だったね、昭和十六年の、四月」(179頁)のように次第に戦争の影が忍び寄ってくる。恭一もまた友達の影響で『少年倶楽部』を購読し、「のらくろ」のファンになり、将来は陸軍大將になるとの野望を明らかにしている(125頁)。子どもたちは「少国民」と呼ばれ、男子の多くは軍国少年になっていった。

戦時総力戦体制に入ると、平井家の生活もその影響を受けるようになり、儉約につとめるようになる。雅樹の勤務先である玩具メーカーでも若い社員が相次いで出征していった。しかし、男性の出征をめぐって、タキの小学校時代の同級生、板倉、そして時子の甥である正人との間で、出征の時期が大きく異なることに気付かされる。

タキは1937(昭和12)年時点での故郷からの伝聞の内容として「田舎の小学校の同級生の誰彼が応召したと手紙が来たりした。たいして仲がよくもなかったせいか、順番が来た、くらいにしか思わなかった。あのことはみんながみんなそうだったんだから、いちいち動揺してはいられない。それに、中ではいちばんよく知っていた近所の政吉は、乙種合格で補充兵だから外地には行かないだろうと言われていた」(57頁)と書いている。

他方、板倉については、1938年時点で「ごらんのとおり、たいして体格もよくありませんしね。視力と気管支が弱いこともあって、残念ながら丙でした」(93頁)と述べているように、その数年前に、出身の弘前で受けた徴兵検査の結果は丙種合格であった。徴兵検査のうち体格等位については、兵役法施行令(勅令第330号)の第68条において規定されているとおり、「現役ニ適スル者ハ身長一・五五メートル以上ニシテ身体強健ナル者トス」とし、これを甲種と乙種に、現役兵には適さないが国民兵役に適する者は「身長一・五五メートル以上ニシテ身体乙種二次グ者及身長一・五〇メートル以上、一・五五メートル未満ノ者」で丙種とし、身長一・五〇メートル未満、疾病、身体精神の異常のある者は丁種であった(現代法制資料編纂会1984)。丙種の板倉の出征は1943年の秋であった。加藤(1996)の分析によれば、1940年の数字によれば、受検見込み壮丁人員に対する徴集の割合は、現役兵が約52%、第一補充兵が約21%、計約73%の徴集率にのぼった。つまり、すでにこの頃には20歳の徴兵適齢に達した男子のうち、10人に7人強の割合で徴集され、兵士になっていった。また、1942年の『全国徴兵事務状況』の分析からも、当時の徴集率は79%強に達していたという。この頃になると、戦死者が増大し、板倉のような丙種の者やそれまで徴兵猶予の特権にあった高等教育在学者に人員補充を求めるようになった。

その一方、正系エリート・コースを進んだ正一はどうだろうか。板倉が出征したちょうどその頃、恭一の家庭教師として平井家を訪れた正人と雅樹との間で、「正人君は、徴兵猶予だろ

う?」「自分は理科ですので、兵隊には取られません。同期の者も文科学生は、この秋から学徒出陣ですが」(242頁)という会話がみられる。正一は府立高校卒業後、東京帝国大学の理科に進学したことで、徴兵猶予されていたようだ。兵役法(1927年制定)¹¹⁾により、大学や高等師範学校専攻科などの学生は最高年齢27歳、師範学校・高等学校高等科・大学予科などの学生・生徒は最高年齢25歳まで徴兵を延期されていた。ところが、戦局悪化により1943年10月1日に「在学徴集延期臨時特例」(勅令第755号)が公布され、高等教育機関在学者の徴兵延期措置が理工系と教員養成系を除いて撤廃された。それを受けて20日後には、降雨のなか、明治神宮外苑競技場で「出陣学徒壮行会」が開催されたが、このとき出陣したのは主に文科系の学生であった。同年12月には丙種合格者も出征することになり、板倉も入隊した。タキによれば、「でも、その正人ぼっちゃんも、終戦の年には召集になった。板倉さんにしても、正人ぼっちゃんにしても、『取られない』と聞いていた人はみんな結局、兵隊に取られた」(242頁)とあるように、終戦の年である1945年3月には国民勤労動員令が下り、17~45歳の男性全員が「根こそぎ動員」されたのである。

これまでの研究でも明らかにされているように、総力戦体制や挙国一致の大義名分があったとはいえ、すべての男子が同時期に出征していったわけではない。最も早い時期から出征し、最も大きな犠牲を払ったのは労働者や農民であった。しかし彼らは最も強く戦争を支持した。労働者は資本家に対して、農民は地主に対して、国民は国家に対して、自己主張を強めていき、その実現を政党に託していった。政党は戦争によって、その重要性を高めていくことになった(井上2007)。

6. おわりに

本稿はフィクション小説をもとに、当時の時代背景や家族・教育・子どもの歴史の検証をあらためて試みた。すでに小説執筆の段階で、作者の中島自身が聞き取りや関連史資料を丹念におこなっており、戦前・東京の家族の歴史を正確に描写している。その歴史像には本稿で明らかにしたように複数のコントラストが交叉しており、それこそが本作品中で描かれた歴史の重層性・多相性にはかならない。くわえて、本作品が戦前の新中間層の華やかな生活を描くだけのハッピーエンド・ストーリーではなく、同時期に生起していた戦争、社会現象としての地域・階級格差、密かな横恋慕など、時代や社会の矛盾や闇なども描くことで、さらに物語における歴史的リアリティが増し、それもまた積極的に評価されたのではないだろうか。

また、現代の視点からいえば、いわゆる「昭和ノスタルジー」も評価の一因であっただろう。映画監督の山田洋次は小説『小さいうち』の映画化を熱望し、その旨を便せん二枚の手紙に綴って中島に送ったという。中島の証言によれば、平井家の恭一と山田自身が同い年であること、時子と山田の母親が『風と共に去りぬ』を愛読書にしていたこと、平井家同様に山田の幼い頃にも女中がいたことなどが書かれていたという¹²⁾。本映画は山田自らの記憶を思い出として撮影した作品であるといえるが、本稿で明らかにした原作の時代的・階層的・地域的なコントラストは、これまで山田自身が監督としてメガホンを握ってきた作品で表現されてきた「階級」と「下町」といったテーマあるいは問題群と関連があるようにおもわれる(橋本2006)。

1963年に公開された『下町の太陽』では、主演を務めた倍賞千恵子(役名・町子)は下町の古い住宅街で暮らし、化粧品工場で石鹼を包装する女工の役を演じた。恋人役の早川保(役名・道男)は、労働者階級から新中間階級へ、下町から山の手または郊外へと上昇移動を目指し、社員試験に臨む。しかし、町子はサラリーマンの妻や専業主婦としての生活に疑問を抱き、道男のプロポーズを断り、下町の労働者階級の妻として「働く女性」としての生活を敢えて選ぶとする。

本映画を皮切りに、以降、倍賞は山田作品に相次いで出演する。なかでも代表作というべき『男はつらいよ』シリーズ(1969～1995年)では、東京・下町出身の渡世人の妹であり、印刷工場で汗まみれになって働く労働者の妻でありながら、叔父の営む下町の小さな団子屋を手伝う女性・さくらを長らく演じてきた。また、『幸せの黄色いハンカチ』(1977年)では、北海道の炭鉱夫の妻として、罪を犯した夫の出所を待ち続ける女性を好演したが、廃れた炭鉱町の小さな商店のキャッシュ・レジスター、いわゆるレジ打ちの仕事をしているシーンもみられる。そして、映画『小さなうち』で、老年のタキを演じたのもほかならぬ倍賞であった。以上のように、倍賞は山田監督作品を通じて「働く庶民の女性」を演じてきたともいえる。いずれの役柄や作品でも、経済的には決して恵まれているとは言えないが、右肩上がりの経済発展をわずかばかりでも享受できたことで、衣食住に事欠く生活を強いられたわけではなく、むしろ地域社会の豊かな人間関係や家族の親密性のなかで、互いに支え合いながら慎ましく、たくましく生きていこうとする「昭和ノスタルジー」が理念型として描かれてきたようにみえる。

ところが、いま・この日本における、長引く不況、格差の拡大、個人化に伴う「平成の閉塞感」はその昭和ノスタルジーの裏面にあるとあってよいのではないか。作品と同時期を生きてきた世代の人々は当時の記憶を入れ込みつつ、それを知らない者たちはノスタルジーを求めて、そこに理想を描き、癒しを得ることができる。とはいえ、本作品は複数のコントラストや社会的格差も描かれており、いま・この日本社会の状況とも重なる部分が少なくない。本作品は、昭和ノスタルジーを惹起しながら、平成の閉塞感からの脱却を強く願う現代人にとって、大変魅力的な作品に映ったに違いない。

付記

本論文は平成26年度・科学研究費補助金・基盤研究(C)「公共非営利組織としての私立小学校の経営問題に関する日英比較教育社会学的研究」(研究代表者・小針誠)による研究成果の一部である。

注

- 1) 教育史研究においては、伊ヶ崎(1974)が文学作品における教育史関連の記述に注目し、その史実の検証と意義を紹介している。社会学の分野では、山中ら(1993)が映像、特に映画の内容から社会学の理論や諸概念を学習できる大学生対象のテキストを刊行している。同書が刊行された90年代初頭、大学進学率は25%を超え、従来の教科書と板書による講義とは異なる形式の授業が模索されていたのだろう。フィクション小説・映画は、その親しみやすさゆえに、十分な時代考証を加えれば、大学等の講義など教育活動においても利用可能な映像資料になると考えられる。
- 2) 原作では「平井の旦那様」とだけ書かれており、具体的な名称は与えられていない。したがって、これは映画版における名称である。

- 3) 中島の丁寧な時代考証は以下の発言からも推測される。「構想を練り始めてから執筆にかかるまでに約2年ありましたので、その間に神田の古本屋や国会図書館、ネット書店などで、その時代のものを探したりしました。女中さんが出てくる話、という構想は割と早くから決まっていたため、有力な情報源となったのはやっぱり当時の婦人誌ですが、当時のレストランガイドや旅行案内なども読みました。また、タキさんは山形出身なので、山形から東京へはどうやって出てくるんだろう、とか細かいところも知りたくなって、当時の奥羽本線の時刻表を見てみたり。作品中でお勤めしているお宅の坊ちゃんが受験をするため、すごく昔の蛍雪時代などを読んだりもしました。昭和19年の春からタキさんは山形に帰ってしまうので、当時の山形新聞も。とにかく登場人物が本当に読んでいただろう資料を使って書きたい、と思ったので。」(楽天ブックス 著者インタビュー <http://books.rakuten.co.jp/event/book/interview/nakajima-kyoko/> 2014年11月15日アクセス)
- 4) 『婦人之友』は羽仁もと子が1908年に創刊し、時子のようなアッパーミドルクラスの主婦を対象とした雑誌であるのに対して、『主婦之友』は石川武美が1917年に刊行した婦人雑誌で、家計簿を付録にしたり、『婦人之友』よりも安価で販売することで、より大衆層の主婦をターゲットとするなど、他の婦人雑誌との差異化をはかった。なお、中島本人は作家になる以前に、主婦の友社に勤務した経験をもつ。
- 5) 戦後、東京高等学校の高等科は新制・東京大学教養学部へ、尋常科は東京大学教育学部附属中学校・高等学校(現・中等教育学校)へ、府立高等学校(旧制)は東京都立大学へ、それぞれ包括された。
- 6) 中学四年生でも高等学校を受験でき、合格すれば進学できた。これを「四修」といった。
- 7) ナンバースクールの高等学校とは明治期に創立された8校を指す。第一高等学校(一高)=東京、二高=仙台、三高=京都、四高=金沢、五高=熊本、六高=岡山、七高(造士館)=鹿児島、八高=名古屋を指す。それ以降設置された高校は自治体名を付すことから「ネームスクール」と呼ばれて区別、ときに差別されることもあった。
- 8) 東京府と山形県の中学校と高等女学校の進学率と入学率は『大日本帝国文部省第六十三年報 自昭和十年四月 至昭和十一年三月 下巻』に掲載されたデータをもとに算出された数値である。
- 9) 誠之小学校の児童の新中間層出身者の割合は1914年・64.4%、1931年・65.5%、1933年・77.3%、1935年・62.7%であった(誠之学友会編1988)。
- 10) 学校や教師も娘身売の状況をそのまま見過ごしていたわけではなく、山形県内の教師も、以下のような「娘身売防止数え歌」をつくって、子どものみならず親に対する啓発活動に努めていた。「一とや 人のいやしむ娘売り 最上は県下で第一よ― 二とや 二人親御は覚醒せ 娘売りは親の恥― 三とや 道は開ける座談会 新たに生きよ娘たち(貞操擁護の為に立て)― 四とや 世の娘子よ心せよ 虚栄のために身を売るな(操を守れ身を守れ)― 五つや 色々魔の手はのびて行く 甘語籠絡注意せよ― 六とや 昔を偲ぶ花魁も 昭和の御代から消えて行く― 七とや 涙や出でん売られた娘 其の行末は悲惨なり― 八とや やけのやんぱち娘売り 世の人々の笑い草― 九とや 心を縮めて懸るなり 多少の負債何のその― 十とや どうでも娘を売る時は 先ず利用せよ相談所―」(田中新治1976『教育運動史考』光文堂書店、ただし、石島2006:187-188より再引)。
- 11) 兵役法以前の徴兵令においても「国民皆兵」が定められていたが、多数の免役条項が設けられていた。体格が基準未滿の者や病気の者が除外されたほか、当初は、一家の主人たる者、家を継ぐ者、承継者、代人料を支払った者、官省府県の役人、兵学寮生徒、官立学校生徒、養家に住む養子は徴兵免除された。
- 12) 倍賞・中島(2014)における中島の証言より。ただし、原作の小説では、時子をはじめ浅野家に嫁ぎ、恭一を出産し、タキも同家の女中として入った。ところが、夫の事故死により、時子は恭一とタキを連れて、実家に戻り、二度目の結婚で平井家に嫁いだという内容になっている。それに対し映画版では、このあたりの複雑な家族事情は一切捨象されている。

引用・参考文献

- 倍賞千恵子・中島京子(2014)「よみがえる昭和の家族 映画『小さいうち』公開記念」(対談)『オール讀物』2014年2月号 第69巻第2号(通巻982号)。
- 現代法制資料編集会(1984)『戦時・軍政法令集』国書刊行会。

- 橋本健二(2006)『階級社会 現代日本の格差を問う』講談社選書メチエ。
- 秦郁彦(2003)『旧制高校物語』文春新書。
- 伊ヶ崎暁生(1974)『文学でつづる教育史』民衆社。
- 今田絵里香(2007)『少女の社会史』勁草書房。
- 井上寿一(2007)『日中戦争下の日本』講談社選書メチエ。
- 石島庸男(2006)『山形県近代教育小史』山形県教育史研究会。
- 落合恵美子(1997)『21世紀家族へ〔新版〕』有斐閣選書。
- 上倉裕二(1952)『山形県教育史』弘文堂 武田活版所。
- 加藤陽子(1996)『徴兵制と近代日本 1868-1945』吉川弘文館。
- 木村元・所澤潤(1988)「日本の近代小学校と中等学校進学—東京市公立進学有名小学校の変化の事例に即して—」『東京大学教育学部紀要』第27巻。
- 小針誠(2007)『教育と子どもの社会史』梓出版社。
- 小針誠(2009)『〈お受験〉の社会史 都市新中間層と私立小学校』世織書房。
- 小山静子(2002)『子どもたちの近代 学校教育と家庭教育』吉川弘文館。
- 誠之学会編(1988)『誠之が語る近現代教育史』第一法規出版。
- 清水美知子(2004)『〈女中〉イメージの家庭文化史』世界思想社。
- 東京都立教育研究所(1996)『東京都教育史 通史編 三』。
- 牛島千尋(2001)「戦間期の東京における新中間層と女中」『社会学評論』第52巻第2号。
- 山中速人〔執筆代表〕(1993)『ビデオで社会学しませんか』有斐閣ブックス。